



publishing house: moriyama 2-19-52 Kanazawa
Jodo Shinayuu Jhokoji phone 076-252-4922
<http://www.spacelan.jp/~jhokoji/2006.03.01>

おたいしんすけのむすび

大谷大学学長 木村 宣彰

紹介にあずかった木村でございます。今年もお招きいただきありがとうございます。浄光寺さんではお彼岸に「おたいしんすけの御忌」を勤めておられます。

「ご存じのように親鸞聖人（ご開山）は聖徳太子さま（太子）を尊敬なさっております。沢山のご和讃をつくっております。

その中に：『和国の教主聖徳王／廣大恩徳謝しがたし／一心に帰命したてまつり／奉讃不退ならしめよ』（皇太子聖徳奉讃八首）：というご和讃があります。太子は日本のお釈迦さ

らである。日本人に仏教を説かれた、恩徳はとても大きい。だから一心にそのことを思つてほめたたえる。奉讃することを止めてはいけませんよ。わざわざお示し下さったのです。私たちはしっかりとそのお心をいただき歩まねばならぬのですよ。

昨年はイラクの話もしました。なんとか平和になつて欲しいと願うのですが、悲しいことにいまだ争いがあり、混沌とした状態が続いております。先ほど役員さんとの話でふつと思つたのです。わたしはこの人が好きだから、気が合うから、お茶を

飲んだり、食事にいつたりして何時も逢つて話をするのだと思つていますね。だんだん逢わぬようになってくると疑心暗鬼になつて「あの人のわたしの嫌いな事はないか、恨んでるんじゃない」などと様々な事を想い気が合ふからというよりは、逢う回数が増えお話しが増せば、次第に気があつてくるといふか、相手のことが分かつてくるといふことがある。だんだん好きになつてくるんです。むしろ後者の方が本当かもしれません。仏教はそのところを教えていると思ふのです。

―わたしは良い家族に恵まれ快適な生活ができる。幸せで、感謝の日常らしさをさせていたいております。と。よく耳にするわかりやすいお話しです。

子供は立派に育つて、祖父母、両親のことも気をかけてくれる。足もそう痛くならぬでなんとか日暮らしができる。幸せなことだ。あゝ勿体ない、ありがたい、感謝をしましよ。うとね。考えてみますと、仮に足が神経痛で痛い。それでも浄光寺さんへおまいりができる。勿体なくあゝと感謝できる。その感謝できる人が幸せなのですよ。足も痛くないし、お

金もあるし、あらゆる面で恵まれているけれども、感謝できない人は幸せではないのかもしれない。

そうだとすれば、傍から見て不自由そうにみえても、不便そうにみえても、その人は本当の意味において幸せなのかもしれません。

世の中を見渡せば、あんな良い生活をしているのになぜか毎日諍（いさかい）して、心休まらぬ日々を送っている例はいっぱいあります。一般にはものに恵まれていれば幸せで、感謝できると思われがちだが、実はどんな逆境にあらうとも感謝できる人こそが幸せと言えましょう。

イラクの争いを思うと、前に言いましたように、恋人同士でも好きだから、気が合うからと云う面だけで逢うのではなく、逢つて話をすれば気が通じ合うものができるともいえます。このことをつくづく思うわけです。

きょうはお彼岸です。お彼岸というのはこの娑婆世界（此岸）とは違う世界ですから、理想的な世界・諍のない世界・戦争のない世界です。だれしもが、そういう理想的な世界に往きたい、生まれたいと思うのです。したがつてこの此岸における私

たちの姿なり、自己の在りようを的確に捉えて、一步踏み出させてもらえることがお彼岸というものでしょう。

周知のように、太子は『世間虚仮唯仏是真』：世間は虚仮であつて、仏の世界だけが真実：だとおっしゃつた。これは取り違えてはいけません。私たちにとつてここに生きてゐることはとても大事なことです。

今日一日、が大変尊いことなのです。しかしこの娑婆での生き方が本当に尊い生き方をしてゐるのかを知るためには、娑婆だけを見ていたのでは：井の中の蛙大海を知らず：になり、自分の生活が分からなくなる。だから太子は人々の生活の幸せを考えて、仏教の受容に尽力され、その精神をたのむ政治をされた。そのことが特筆に値することなのです。

これは一面から見ると、世間を捨て、仏の世界へサツサと往こうかという話になるかもしれません。しかし私たちは簡単にこの娑婆世界を捨てて浄土へは旅立つわけにはいかない。この社会に生きてゐることはどういう事かを知るために、仏教の教えがあることに留意しなければなりません。

ご開山も『浄土真宗に帰すれども／真実の心はありがたし／虚仮不実のわが身に／清浄の心もさらになし』

(愚禿悲歎述懐和讃一首目)とおしゃつておられる。すなわち真実の心は一つもない、虚仮不実だといわれる。

浄土真宗に帰したから、お念仏に遇うたから、わたしの心に真でないものがあるといふことを知らしめていただいたといふことです。

私たちが彼岸に遇うといふことは、彼岸を通してこの世界はどういうものかを知るといふことです。太子が虚仮といわれたのは、嘘・偽りだからどうでもいいとおっしゃてるのではない。仏教の教えに遇つたから、この世界のことがよく分かつてきた、とこうおしゃつてゐる。

自分の顔は自分に一番身近なものだけれども自分には見ることができない。他人の顔はよく見ることができ。自分の顔を見るには鏡が必要なのです。娑婆に身をおくものにとつて仏さまの教えが鏡といえますね。ご開山はお念仏に出会つて、仏さまを通して、「名利の大山に迷う」ような気が起こつてくるとおしゃつてますね。あさましい自分を凝視されたのです。

それが「雑毒の善」なんです。善いこととしても、そこになにか毒が混じつてるといわれる。どうしてそういうことが分かるんですか。仏さんと比べて一寸善いことやつても、どこかに名誉・榮譽を求めたり、一寸疚しいものが混

じつてゐる。仏に帰依して、私を見たときに私が見えてくるのです。

： わたし、仕事休んでボランテアやつてんのよ！：それは善いことだけに、決まつて、：善いことヤツテル：と威張るんですよ。殊にお酒なんかの席でね、本音が出てしまうのでしょうか。

私たちとは違つて、仏さまは全ての人々にお慈悲をもつておられるから、仏さまは、私心配してますよというよいうな、恩着けがましいことは少しもおっしゃらない。それが真の大慈大悲というものです。

ところがわたしも仏さまのような心を持たねばならないと思つたときは、毒がまじつてゐるなあと想うんです。人に親切にしたらしたで、ほら、わたし善いことしたでしょうと。わたしの内の煩惱が騒ぐのですよ。こういう気がどこかで働く。善いことに間違いないから善と云つてゐるんだけど。その善のなかにも毒がまじつてゐる。まあいつてみれば、雑毒の善のよいうなものでしょう。いろんなものがある。ご開山の『正像末和讃』浄土真宗に帰すれども／真実の心はありがたし。お念仏に遇つていただいたけれども、私の心には、真実の心はさらにはない。その念仏を称えてるといふ意味

ではない。念仏に出遇つたから、私の心になんと浅ましいものがあるのかと云うことに気づかされてくるのです。

仏法という鏡があつたからこそ、墨がついた自分の顔が分かつたとおっしゃつておられるのです。先ほどもいいましたが、彼岸といふところは、苦労もなく楽しく日暮らしができるから、はやく往きたい、往きなさいといふものではない。

彼岸の世界を知ることによつて、私たちの世界がどういふものなのか。此岸でどういふ風に生きてらいたのかを知りなさいといふことをいつておるわけです。

仏法で一番大事なのは、「正見」である、お釈迦様の最初の説法で、おしゃつてゐる。正見とは正しいものごとの見方で、考え方が間違つてると全部狂つてしまふといふのです。狂つた見方にはどういふものがあるかといふことを、お釈迦様もご開山もちゃんとおっしゃつておいでになる。正しい見方、どういふ風に生きてらいたのか、とは違つて見方はお釈迦様の時代にも沢山ありました。整理をすれば、無因説・邪因説・一因説があります。たとへば、無因説といふのは私が生きてゐる、ここにお参りさせていたただいた、寄せていただいたのには原因がない。たまたまきたのや、偶然だといふ

考えです。お稲荷さんなんか引つ張られてお参りにきたと云うようなのが邪因説。また一因説というのは大自在天とかいう神様によって、わたしの運命が決まっていますここに連れてこられたという考え方です。

仏法はそんなこと説いてません。行きたいという気持があり、そして様々な人々のおかげでもってここにあるのです。

ご住職と法話の約束してここに来るまでに、電車に乗せていただいたし、私の家族は食事を用意してくれました。わたしの足もなんと故障しないで歩いてくれました。寄せていただいたといいますが、喉が痛ければ皆様のままでお話しできません。かようにさまざまな因と縁によってあることを思うのです。だから生きている間に善きご縁をつくらねばと思ふことが正しい見方です。いや私の生き方が努力しなくても、決まっていると思えば努力しないし、因縁もなにも在るものかと思えば、他人のことを思いやる気持ちも起こつてないでしょう。正しいもの見方をいただくことは大事なことです。そうであれば、私たちが仏法に遇わせていただいたということはとても尊いことなのです。これがもし間違つた教えに会つていたら、間違つた生き方をするに決まっています。当然結

果も間違つたものになります。

人を殺せば幸せになるという宗教があつて、それに遇えば人を殺すかも知れません。幸せになりたいという一心でね…。

そうではなくて、皆さんもご縁の内に生きてると気づかせていただいたなら、これは感謝しなければ、それこそ罰が当たるといふものではないでしょう。感謝できれば幸せになれるのです。

勿論、仏法は金持ちになるための教えではない。そりゃあ、お金があつた方がいいかもしれん。それに違ひないがや。それを得るためにどれだけの人を傷付けてきたことか。また金持ちになつたからといって、喜ばないことも多く、本当の幸せを得るとは到底思えません。そうではなくて自分の思いが満たされなくとも、喜んで日暮らしができる、感謝できる、安らかな心が持てるような生き方が大事なのです。それにはどうしたらよいかということとを教えて下さるのです。そのことを最初に私たちに教えて下さつたのが太子さまです。

ご開山は「倭国の教主聖徳王／廣大恩徳謝しがたし／一心に帰命したてまつり／奉讃不退ならしめよ」と、どれだけ感謝しても感謝しきれない。だから誉め称え続けて下さいといわれる。皆さまはそれをずっと実践してくだ

さつてるわけですから、とても尊いことと思つております。

先日、京都の社会福祉協議会のかた方と話す機会がありました。ある方が：社会福祉の始まりは太子さまでしょう。病院やお寺を造営・十七条憲法・冠十二階・經典の講義等みんなが幸せになるように、様々のことをなさつたと聞いておりますが。その太子さまがなぜ中国に遣隋使を派遣されたのか：とお尋ねがありました。

私なりに想いはあつたのですが、これは一度考えてみたらいいなあと思つた。これからは中国を無視してはとも生活はできないと思ひます。今日もメディアは報じていました。

二〇五〇年にはアメリカを抜いて中国が経済大国になるといわれています。一九七五年は日本がGNPが一位といわれていましたが、とつくに過去のことでです。少しずつ経済が良くなつていくのは中国のおかげでしょう。

丁度東京オリンピックのまえの時期のように、高速道路ができ、高層ビルが林立しています。鉄鋼は日本からです。おもうに中国は、我が国の先輩ですよ。太子の時からずっと中国が文化の中心で、種々なものを学んでいるのですよ。永らく尊敬していたんです。それがあるときから急に中国が駄目に

なつてしまふのです。

それは一八五三年の黒船来航です。「開国せよ、貿易しましょう」と。その後ロシア・オランダ・ドイツ・イギリス等が次々とやって来て、ご承知のような不平等な通商条約を結ばされたんですよ。ペリーが来てから二〇年後明治政府の反応は早かつた。閣僚は挙つて先進国の視察に出かけるのです。その中心が岩倉具視なんです。二年間も国を空けてまで、いわゆる岩倉ミッシヨンが欧米一二カ国を駆けめぐり、見聞を広めたのです。直接各元首にあう毎に全く知らなかつた世界が見えてきたのです。西洋とはこういうものだとも初めて気付いたのです。そのうちに中江兆民や津田梅子等を輩出し、明治の文化を創り上げることになるのです。

前にいいましたように、仏に遇うことによつて自身の心の醜さが知らされるように、また彼岸の世界を知ること、此岸の世界が分かつてくる。同じように西洋を知ることによつて、日本が分かつてきたといえましよう。

そうなるに従来の中国観が一変して、清朝なんて大したことはない、アヘンに苦しんでる国にすぎない。：眠れる獅子：ではないかということになり、それにひきかえ、西洋は凄いと云うことになつたのです。そういう見方は

今日まで引きずつてると思えますね。二一世紀中国関係がとても重要になるとすれば、もう一度、太子が中国と交渉なさったのは何故か、どういう事を学んだのかをよく見て、またどういう願いのうえになされていたのかをよく考えてみる事が大事だと思います。

当時の対中国との関わり具合をプリントしてきました。太子以前からの交渉関係も記しておきました。面倒でもすこし目を通して、お付き合い下さい。五七年、後漢の光武帝のとき、日本から使者がいつております。いまでも遠いですね。一九五〇年前、船に乗って、日本から出向いてるわけです。大変だったことは容易に想像がつかますわ。日本には文字もない時ですよ。中国の人がはるばる来たたと記録してるのです。

倭という国があり、倭の王の存在が、世界史上はじめて記録されたんですな。それが五〇七年です。その時、かの黄金の印鑑を与えております。余談になりますが、持ち手が「龜」とか「龍」が一番よい。日本に与えられたのは持ち手が「蛇」で、一寸差があります。さらに北方の匈奴に与えたのは「駱駝」の持ち手です。この実物は、大谷大学に収蔵されてあります。中国の『後漢書』にはのち邪馬台国の卑弥呼

という女王が奴隸一六〇人献上して金印をもらっているらしい。四八二年位から、誰も行かなくなつた。

そういう中で太子は六〇〇年遣隋使を派遣されたのです。この記事は『日本書紀』には載せられていない。

しかし中国の『隋書』には六〇〇(推古八)年に太子から使者が文帝に謁見したという意外な記事があるので

その「倭国伝」に「開皇二二〇(六〇〇)年、倭王、姓は阿每、字は多利思比彦阿鞞羅弥と号す。使を遣はして闕に詣る。上、所司をしてその風俗を問はしむ」とある。日本の・風習や生活はどんな具合ですかと文帝が聞いておる。昔は交渉があつたが暫くなかつたから。こう答えた。「使者言ふ。倭王は天を以て兄となし、日を以て弟となす。天未だ明けざる時、出でて政を聴き、蹴踏して座し、日出れば便ち理務を停め、云ふ。我が弟に委ねんと。高祖曰く、此れ大いに義理なしと。是に於て訓へて之を改めしむ。王の妻は鷄弥と号す。後宮に女六・七〇〇人あり。太子名づけて利歌弥多弗利となす。城郭なし。頭にも亦冠なく、但し髪を兩耳の上垂るのみ。隋に至り、其の王始めてその冠を制す。綿綵をもつてつくり、金銀を以て花を鏤目、飾りとなす―中略―文

字なく、唯木に刻み、繩を結ぶのみ。百済に於いて、仏法を敬す。仏教を求得して、始めて文字あり」(城郭なし、迄が推古八年の使者の言Ⅱ定説)一四〇〇年前の倭の使節がこう説明してる。推古天皇は太陽が出る前はあぐらをかいておいでだ。日が出てしまふと政はなにもしない。文帝に叱られた。そんな馬鹿な！もつと国民の声を聞いて、シツカリ政治をしなさいとね。

太子さまは日本を他国に比して、立派にしようと懸命に努力された。内政に一段落のついた六〇七年(推古一五)、太子は隋へ正式の使節を遣わした。『隋書』の文には「大業三年(六〇七)其の王多利思比孤、使を遣はして朝貢す。使者曰く、海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞き、故に朝拜せしめ、兼ねて沙門數十人來たりて仏法を学ばしむ」とその国書に曰く、『日出ずる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙なきや云々』と。

帝見て悦ばず。鴻臚卿に謂つて曰く、『蛮夷の書、無礼なるものあり、復た以て聞するなかれ』と大變詳しい。「書を致す」という句は突厥沙鉢略可汗が隋に送つた国書に、「恙なきや」は匈奴の冒頓单于が漢に送つた国書に見える。いずれも対等の位置にあつたときに送つた国書の文言です。太子はあくまで対等の立場を貫徹して、こうい

国書を送つたものでしょう。隋の煬帝が蛮夷の書、無礼なるものあり、以後取り次ぐなど、怒つたのは当然なことです。中華思想の頂点にたつ「帝」であつてみればね。しかしおもしろいことには小野妹子の帰国に際しては裴世清を来日させておりますがね。

皆さんにお見せしたいものがあります。隋の時代、周辺の国から使者がやってくるのですが、そのさまを描いた絵を南京の博物館に見ることができました。

よく見るとですね、倭国の使者の頭には冠はない。鉢巻きみたいなものを巻いている。足は裸足で布をダラッと身体に巻いているだけなんです。百済の使者は靴を履き、冠をしている。歴然たる差があります。更に、高句麗の使者ですら冠はしてありますよ。なんか寂しく感じました。何が日出ずる処の天子か、書を日没する処の天子だ。なんで恙なきかだよ。皇帝が不愉快になるのは当たり前です。

六〇〇年の屈辱的な遣隋使派遣より、七年の間内政の充実に心血を注がれた。

すなわち、六〇一年に斑鳩の宮の造営・六〇三年に冠位十二階をさだめた。従来カバネは氏に世襲されてきた。個人の位次(カウムリノクライ)本意に改めた。氏姓に関わらず能力次

第で高位の冠を被れるようになったという事です。徳・仁・義・礼・智・信でそれぞれ大・小の二つに分けられ、十二になるのです。おそらく、冠のない・裸足の使者の姿と他国のそれと比して、日本が国際的に立ち後れているとの実感を強くもたれたあかしでしょう。

更に六〇四年には「十七条憲法」を定め、飛鳥に大仏を、三経の講義をされている。これらは皆中国と対等に渡りあえる手だてだと考えられます。仏教を受容するというと、寺院を造らねばならなくなる。その際に技術集団(大工・左官・鐵・鋳物) 仏具・經典の紙・墨・筆等をつくらねばならない。その技術がトータルで伝わってくる。そういう意図をもって六〇七年には隋に数十人の僧を派遣した。太子は、三世にわたり、間違いのないもの、それが仏法と考えられた。

そのことを受け入れることによって隋という大国と対等に付き合いができた。これはほんとうに尊い、高邁な理想を持って、外交をなさったと強く思うところですよ。

仏法をいただくことによって、自分の生き方を学び、生かすことができる。お彼岸に詣らせてもらうことによって、彼岸の世界を想い、私たちの世界を知らせていただくのです。お念仏に

遇うことによって、この火宅無常の世界が「そらごとたわごと、まことあることのない」ことを知らせていただくのです。

十七憲法にも「共に是凡夫(ただひと)」とか「上下和い諧れ」ということが織り込まれている由縁。それが明白になるのです。

これが日本を発展させる基と、自信を持って隋に使節を送ったのでしよう。殊に仏教受容に積極的であったことはいうまでもありません。

ご開山はといえば、そのような太子の命を賭けて、使節を送り、日本に仏教を伝えていただいた。そのご苦勞を「お念仏は言葉では、いいあらわすことはできない、量つても計り知れない程大きい」と。その心からの敬意が「和国教主聖徳王／廣大恩徳謝しがたし／一心に歸命したてまつり／奉讃不退ならしめよ」前出のご和讃になったのです。

ご開山の時代、鎌倉は鎮護国家から貴族を経てようやく、民衆の個人救済へと進んだ世でもありました。いままでは、リッチな限られた人が救われるとする、自力作善を勧めた教えが中心でした。しかし持ち家もなく、日々の生活に齟齬する人達はどうかなるのか。煩惱を断とうとしても不断な、自力作善の、普通の人を捨ておいてよ

いのかという問題が起こつてきましてね。ここに自然に、作善できない人、善を積もうと思つてもできない人が悪人であつてみれば、そういう悪人こそが救われなければならぬ。とする「悪人正機」説がでてまいります。一部、保守的な解脱房貞慶なども、のち悪人は救われなければいけないといっている。

ではいったいどうしてこの人達を救うのか。たとえば、勉強できる子が高い点数をとるのは当たり前、勉強したくない子を勉強させるか、考える力をどうつけさせるかが、大事なのです。「悪人正機」は救われる順序の問題。しかし「悪人正因」というのは悪人がどうしたら救われるのかという問題でしょう。

ご開山ははっきりおっしゃっている。「他力をたのみ悪人」が、「弥陀のよつて」救われる。「本願力を信じなさい」といわれる。「他力」というのは、お願ひしますということでは無い。他力というのはそれをよりどころにするよつて云うことですよ。そういう人は弥陀の本願によつて救われていきますよ。

太子によつて、仏教を伝えていただいた。すべての人が救われなければならぬとする太子の理想は鎌倉時代のご開山によつて実現するのです。

太子時代には残念ながら、念仏の教えの根源には到達しなかつたけれども、ご開山は、正しく太子からの宿題としてそこを考え続けておられたのでしよう。そしてながき時を経て「悪人正機」、「悪人正因」説までになった。そこに仏法はすべての人が救われる、尊い教えとして完成したのではないかと思つております。

仏法は私自身を照らし出す鏡です。仏様の前に立つたら「共に凡夫」なんです。ご開山の、異常なほどの、太子さまへの篤いおもいが、時と処を超えて、「ただ、念仏の道」をひらかしめたと言えます。これも太子さまから宿題をいただいたまものと思つて感謝いたしております。ありがとうございます。

へんしゅうこうき

本稿は二〇〇四年三月、浄光寺の「おたいしさん」の法話録です。今回は西一恵女史にテープおこし、お願いいたしました。御礼申し上げます。紙面の都合上、一部割愛し、記載いたしましたことご了承ください。

尚、当寺の充実に腐心しております。「結草」に限らず、ご意見、ご要望、その他ご相談等あれば、ご遠慮なく左記にご一報いただければ幸甚です。

金沢市森山二一九一三二
☎〇七六一二五二四九二二
浄光寺